

ひとり親家庭の外国にルーツを持つ子どもが 学習と就労で直面する困難

BAO Xiaoyu

本研究の目的

本研究は、一人親家庭で育つ外国ルーツを持つ子どもが直面する困難の実態を明瞭にし、その発生の原因と影響を分析することを目的としている。とりわけ、在日外国人の育児ストレスや教育問題に焦点を当て、一人親世帯の外国ルーツを持つ子どもへの影響を探る。

研究方法

本研究の課題として、次の 3 点が挙げられる。1)外国ルーツを持つ子どもが直面する問題について、支援団体がどのように認識しているか。2)団体が提供する支援の実際とその影響は何か。3)共生社会の実現に向けて、何が欠けているか。

本研究は、「両親または親のどちらか一方が外国出身者である子どもへの支援の実際」を明らかにするために質的研究法を用いた。具体的には、外国ルーツを持つ人を支援する NPO・NGO の職員からの語りを通じて現状を把握する。そのうえで、支援団体が把握している子どもの問題、先行研究で指摘された問題との差異、そして実際に行われている支援の詳細と支援現場の実態をインタビュー調査により明らかにする。調査対象者として、外国にルーツを持つ人を支援した経験があり、在籍 3 年以上で、自身の実践内容について語れる職員を選定した。

結果

調査の結果、以下の問題点が明らかになった。ひとり親家庭の外国にルーツを持つ親子において、親の日本社会への適応困難はその子どもの社会適応に大きな影響を与えていた。具体的には、日本語能力を持つ子どもが大人の役割を果たすことによって、その子どもは不登校になるなど、学校生活に影響を及ぼしていた。また、外国ルーツのある女性、特に一人親家庭の母親は家庭内孤立、DV などの問題が生じている場合があった。

また、子どもたちが直面する困難は、行政の支援が十分に届いていない事実を浮き彫りにしている。民間団体では子どもたちの状況を全体把握することが困難であるため、支援を提供するにもハ

ードルが高い。早期介入が不十分であるため、子どもたちは繁華街へと移動し、そこでさらなる差別を受けたり、薬物への依存に陥ったりするなどの問題が生じている。

これらの問題を解決する取組として、以下の 3 点を提案した。

(1) 親自身が日本語を学ぶ仕組みの強化の必要性である。外国ルーツを持つ親自身が日本語を学ぶ仕組みを強化することで、親自身の言語能力を向上させ、子どもの教育や日本社会での生活に必要な情報へのアクセスを可能にする必要がある。

(2) 公的支援を補完する民間の支援の内容と連携の拡充である。公的支援が必ずしも十分でない現状で、民間の支援機関の役割が一層重要となる。

(3) 子育て開始時からの支援体制の構築である。親が子育てを始める段階から、より手厚い支援が必要とされる。

以上の取組を通じて、外国ルーツを持つ一人親家庭が直面する困難を解消し、その子どもたちがより良い環境で育つことを目指すべきである。